

主催

日本内経医学会

二松學舎大学私立大学戦略的研究基盤形成支援事業

内経学の系譜と 漢学教育

講演・シンポジウム要旨集



日時 : 2018 年 4 月 30 日 (月・祝) 13:00-17:00

会場 : 二松學舎大学 九段校舎 中洲記念講堂

□ 開催趣旨 □

二松學舎大学私立大学戦略的研究基盤形成支援事業
「近代日本の知の形成と漢学」研究代表者
町 泉寿郎

近200年の我が国の近代化過程において、「漢学」（漢字・漢文による学び）は単に衰退したのではなく、或いは「洋学」導入の土台となり、或いは国民意識の形成に寄与するなど、学術・教育における変容・再編を経て今日に至っており、この学術・教育体制は東アジア諸国にも影響を及ぼしてきた。その事態は、医学のような漢学から洋学に截然と転換したように見られている分野においても、同様であったように思われる。

そこで、中国医学古典の代表格である「黄帝内経」の学的系譜に焦点を当ててその歴史的な回顧をふまえつつ、東アジアにおける伝統学術の現状と課題を考える場を設けるために、本講演会・シンポジウムを開催する。

日本内経医学会 会長
宮川 浩也

このたび、内経学の研究発表の場として、講演会・シンポジウムを開催することができ、とても喜ばしく存じます。日中の研究者が集い、討論することにより、内経学が大いに発展するものと思います。

『黄帝内経』は、とくに鍼灸医学においては、かけがえの無い古典です。日本の鍼灸医学は、江戸時代に盛行しましたが、その原動力は『内経』でした。『内経』が深く研究されたことにより、鍼灸医学が深まり、そして技術が明確化されました。明治以降、『黄帝内経』の研究は休眠状態になり、それに伴い鍼灸医学も低調に推移しました。昭和になって『黄帝内経』の研究が再び始まり、数多くの研究が蓄積されました。昭和から現在にいたるまで、日本の内経学はおおむね個人によって支えられています。1983（昭和56）に明治鍼灸大学が設立され、その後相次いで鍼灸科を持つ大学が設立されましたが、大学での内経学は確立せず、依然として個人によってすすめられています。この意味でも、漢文教育の本丸ともいえる二松學舎大学で、内経学の講演会・シンポジウムが行われることは、今後の内経学への大きな一歩になると確信しています。

□ スケジュール □

13時 開会の辞

趣旨説明

第1部：講演会

13時20分～14時20分 基調講演Ⅰ「血氣一開啓《黄帝内経》之門的密鑰」

中国 中医科学院 首席教授 黄 龍祥

14時20分～15時00分 基調講演Ⅱ「日本における内経の受容と変遷」

北里大学 客員教授 小曾戸 洋

10分休憩

第2部：「内経学の系譜と漢学教育」

15時10分～15時35分 「中国における内経学の歴史と教育の現況」

明治国際医療大学 特任准教授 斉藤 宗則

15時35分～16時00分 「明治期における日中医書交流」

二松學舎大学 文学部教授 町 泉寿郎

16時00分～16時25分 「近代日本の内経学の発展と普及」

日本内経医学会 会長 宮川 浩也

第3部：総合討論

16時25分～16時55分 総合討論

17時 閉会の辞

17時30分～19時30分 島田隆司先生顕彰会（13階ラウンジ）

「血气一开启《黄帝内经》之门的密钥」

中国 中医科学院首席研究员 黄龙祥

著之玉版，藏之兰室金匱的《黄帝内经》，千百年来有多少鸿儒大医多少次地尝试走进兰室，打开金匱，一睹玉版之论。为了给后人指点迷津，少走弯路，传世本《黄帝内经》本身就载有“玉版论要”这样的专篇，后世医家更有《金匱要略》《兰室秘藏》的专著。然而两千多年来究竟有没有人论得玉版之要，金匱之略，兰室之秘呢？在我看来要进入“灵兰之室”需要开启三道门，才能登堂入室，一睹玉版《内经》真面目。这三道“门禁”需要用三种不同的方法开启：“微观”、“宏观”和“内观”（又曰“内视”“内求”），三种方法不是孤立的，而是常常交互应用的，也就是说如果你只精通一种方法，哪怕是登峰造极做到极致也难以打开兰室之门。在这三条路径中，日本前辈在“微观法”和“内观法”用功最勤，所得最多，贡献也最大，特别是在微观方面，令我印象最深。今天要与大家共同探索的是“宏观之路”。这一路径要探讨和解决的基本问题是：《黄帝内经》的结构，包括“编纂结构”和“理论结构”。《黄帝内经》的理论框架是由一个个命题搭建的，这些命题大致可分为“身体观”“疾病观”“诊疗观”，而每一类命题集中又各有重点，例如“身体观”的实体部分表现为以下几个特点：

第一，五体之中独重“脉”。

第二，五脏之中重心胃。

第三，五官之中独重目

第四，肢体之中重标本。

第五，腹背之中重中线。

那么，这一个个“重点”是如何确立的？各要点之间有何内在的联系？“身体观”与“疾病观”“治疗观”的命题是否存在着共通的理论原点？只有找到元命题，才能将一个个命题构成一个有机联系的命题集，形成一个自成体系的理论框架，也才能令人信服地回答上述问题，真正理解《黄帝内经》。

实际上，这个谜底已经在《黄帝内经》的黄帝、岐伯问答中，借岐伯之口多次提示了，今天我就和大家一道打开这个谜底，用一种新的视角和思维方式解读《黄帝内经》，体验一个大不一样的《黄帝内经》世界。

— 講演者略歴 —

黄龙祥，男，1959.5，中国中医科学院首席研究员。

现任国家中医药管理局重点学科针灸学的学术带头人、局级重点研究室“针灸理论与方法学”研究室主任。ISO/TC249/WG3召集人—国际标准化组织中医技术委员会针灸组。

主要研究领域：针灸理论研究；针灸学术史研究；中医针灸典籍研究。

代表作：《经脉理论还原与重构大纲》、《中国针灸学术史大纲》、《实验针灸表面解剖学》、《针灸腧穴通考—中华针灸穴典研究》、《黄龙祥看针灸》、《针灸典籍考》、《老官山出土汉简脉书解读》等。

「血氣—『黄帝内経』の門を開くための秘密の鍵」

中国 中医科学院 首席教授 黄 龍祥

玉版に著され、蘭室・金匱に蔵された『黄帝内経』は、何千何百年もの間にどれほど多くの鴻儒や大医が、どれほどたびたび、蘭室に入り、金匱を開き、玉版の論を一瞥しようと試みてきたことか。後人が渡し場で迷わないように、回り道をしなくてすむようにと、伝世本の『黄帝内経』それ自身にすでに「玉版論要」のような専篇が載り、後世の医学者にはさらに『金匱要略』『蘭室秘藏』といった専著まである。しかるに、二千年余の間に結局のところどれほどの人が玉版の要、金匱の略、蘭室の秘を論じ得たというのか？私のみるところ「靈蘭の室」に入りたければ、三つの扉を開ける必要があり、それではじめて堂に登り室に入って、玉版に著された『内経』の真面目を一瞥できるのである。この三つの「閉ざされた扉」には三つの異なった方法を用いて開く必要がある。すなわち「微観」（ミクロ）、「宏観」（マクロ）と「内観」（あるいは「内視」また「内求」）である。この三つの方法は孤立したものではなく、いつも互いに交叉させて用いるべきものであつて、いいかえれば、もし貴方がただ一つの方法に精通しただけでは、その水準がいかほど高度を極めようとも、蘭室の扉を開くことは難しいであろう。この三つの道のなかで、日本の先輩たちは「微観法」と「内観法」について、ほねおることを最も勤め、得るところが最も多く、貢献度も最も高い。特に微観の方面に、私は最も深く感銘を受けた。本日、皆さんと共に探索したいのは「宏観の道」である。この道筋から検討し解決しようとする基本的な問題は、『黄帝内経』の構造であり、これには「編纂上の構造」と「理論的な構造」が含まれる。『黄帝内経』の理論的な枠組みは個々の命題によって構築されたものであり、その命題は大きく分かれて「身体観」「疾病観」「診療観」となり、それぞれの命題集の中におおのこの重点がある。例えば、「身体観」の実体部分は以下のいくつかの特徴として表現される。

第一、五体の中では「脈」のみを重んずる。

第二、五臓の中では心胃を重んずる。

第三、五官の中では目のみを重んずる。

第四、肢体の中では標本を重んずる。

第五、腹背の中では正中を重んずる。

それでは、こうした個々の「重点」はいかにして確立されたのか？それぞれの要点の間にはいかなる内在の連係があるのか？「身体観」と「疾病観」「治療観」の命題には共通の理論的な原点が存在しているのか否か？もとの命題を見つけたしてこそ、個々の命題は一つの有機的に連係された命題集を構成し、おのずから体系をなす理論的な枠組みを形成するのであるし、このようにしてはじめて上述の問題に対して説得力のある回答ができ、『黄帝内経』を本当に理解することができるのである。

実際のところ、この謎の答えはすでに『黄帝内経』の黄帝と岐伯の対話の中に存在し、岐伯の口を借りて何度も示されている。本日、私は皆さんと一緒にこの謎を打開し、新たな視点と思惟方式をもって『黄帝内経』を解説し、一般に考えられているのとは大いに異なる『黄帝内経』の世界を体験してみようと思う。

— 講演者略歴 —

1959年5月生まれ 中国中医科学院首席研究員。

現に国家中医薬管理局重点学科針灸学の学術指導者にして、局級重点研究室「針灸理論と方法学」研究室主任の任にある。ISO/TC249/WG3—国際標準化組織中医技術委員会針灸組の召集人。

主要な研究領域：針灸理論研究、針灸学術史研究、中医針灸典籍研究。

代表作：『経脈理論還元与重構大綱』、『中国針灸学術史大綱』、『実験針灸表面解剖学』、『針灸腧穴通考—中華針灸穴典研究』、『黄龍祥看針灸』、『針灸典籍考』、『老官山出土漢簡脈書解説』など。

（翻訳担当：郭 秀梅・左合 昌美・荒川 緑）

「日本における内経の受容と変遷」

北里大学 客員教授 小曾戸 洋

『黄帝内経』系の医書は、日本が中国医学に接した当初から受容されてきた。爾来今日に至るまで千数百年の歴史がある(拙著『中国医学古典と日本』52～112頁)。以下、その概略を述べる。

飛鳥時代、大宝元年(701)に施行された「大宝律令」医疾令には、『黄帝内経』に関連する書として『素問』『黄帝針経』『明堂』『甲乙経』『脈経』ほかが医学の教科書に指定されている。『素問』は全元起本であったろう。

奈良時代、天平宝字元年(757)の勅令には、医師の教科書の筆頭に『太素』が挙げられている。針生の教科書『明堂』とともにこの2書は楊上善注本で、8世紀前半に日本に将来されたことがわかる。

平安時代に入ると日本人著作の医書が世に現れる。平安初期には出雲広貞が『難経開委』を、小野蔵根が『集注太素』を著した(失伝)。和気広世は『太素』の講義を行い、かの空海も『太素』を読んでいた。9世紀後半の『日本国見在書目録』には、『黄帝素問』十六全元起注、『素問音訓并音義』五、『素問改錯』二をはじめ、『黄帝内経』関係の書が多く著録されている。10世紀後半の『医心方』にも『太素』『明堂』『素問』など『黄帝内経』関係の書の引用が多く見られる。

鎌倉時代には『座右抄』『吉日抄』『医談抄』『衛生秘要抄』など『黄帝内経』関係書を引用する書がある。鎌倉後期には宋版『素問』(林億新校正本)が到来した。この事実は永仁元年(1293)に惟宗時俊が著した『医家千字文註』の引用によって明らかである。王冰注もこのとき林億本によって初めて日本に知られたと思われる。これより楊上善注『太素』は王冰注を含む林億本『素問』に取って代わられるようになる。南北朝時代の『福田方』における『素問』『靈枢』の引用は宋元版に依っている。

室町時代には宋元明版に依る様々の『黄帝内経』関係書が書写され、印刷出版されるようになった(詳細省略)。

江戸時代初期には馬玄台の『素問靈枢註証發微』が渡来し、講義が行われ、翻刻本が流布した。これによって日本の『黄帝内経』テキストは馬玄台注が主流となった。その後まもなく張介賓の『類経』が伝わり、『類経』を分解再編した類経本『素問』『靈枢』が大いに流布し、張介賓注がもてはやされた。林億本『素問』もよく読まれた。李中梓『内経知要』、呉崑『吳註素問』なども翻刻されている。

江戸時代中期には名古屋玄医『医学愚得』、那須資信『内経知新論』、浅井周伯『黄帝内経靈枢弁鈔』、河野芸隣斎『素問札記』、竹中通庵『黄帝内経素問靈枢要語集注』、森嶋玄勝『内経病機撮要弁証』、門間嘉寛『黄帝内経素問診解』、吉田元卓『内経探蹟』、荻生徂徠『素問評』『素難評』、そして江戸時代後期になると、稲葉通達『素問研』、金窪七郎『素問考』、目黒道琢『素問標記』『靈枢箋』、多紀元簡『素問識』『靈枢識』、多紀元堅『素問参楊』『素問紹識』、渋江抽斎『靈枢講義』、喜多村直寛『素問筭記』『素問講義』、森立之『素問攷注』、伊沢棠軒『素問釈義』、明治初の山田業広『素問次注集疏』など、日本人による『黄帝内経』の注解研究書が数多く著されるようになる。『傷寒論』『金匱要略』のそれと同様に当時の中国を質量ともに凌駕したと言えるであろう。ことに『素問攷注』に代表されるように、考証医学派によって成された研究は、古医学史料の探索収集の成果を背景に幕末に頂点に達した。

— 講演者略歴 —

1950年、山口県下関市生まれ。東京薬科大学卒業。近畿大学東洋医学研究所、鹿児島大学医学部を経て日本大学医学部(生化学)にて医学博士。また同文学部にて文学博士。北里大学東洋医学総合研究所医史学研究部部長を経て、現在、北里大学客員教授。東京薬科大学特命教授。日本医史学会副理事長。日本東洋医学会代議員。武田科学振興財団杏雨書屋副館長。上海中医薬大学客座教授。東亜医学協会常任理事。

編著書に『和刻漢籍医書集成』(エンタプライズ)、『小品方・黄帝内経明堂古鈔本残卷』(北里研究所東洋医学総合研究所)、『中国医学古典と日本』(塙書房)、『日本漢方典籍辞典』『新版 漢方の歴史』『針灸の歴史』(大修館書店)、『漢方なるほど物語』(NHKテキスト)、『馬王堆出土文献訳注叢書 五十二病方』(東方書店)ほか

「中国における内経学の歴史と教育の現況」

明治国際医療大学 特任准教授 斉藤 宗則

1. 内経学の歴史

主に中華人民共和国成立後（1949年以降）の状況を紹介する。「内経学」ということばは1930年代に現れ、80年代には任应秋がその構造や研究方法等を想定した。93年に中華中医薬学会の内経専門委員会の会議で、王洪图が再度「内経学」を提唱して支持された。97年には「内経学」の概念が『黄帝内経研究大成』に収録され、本書は第4回国家図書賞や国家中医薬管理局基礎医学研究二等賞など、数多く受賞した。こうして中国の学术界に認められたといえよう。

50～90年代までは『内経講義』をはじめとした「内経」を書名に用いた教材を使用し、1つの学科として存在していた。90年代の初めに学科の調整が行われ、中医基礎理論学科に併合され、「内経」は学科として消えたかのようになった。2003年に国家級“十五”計画教材の全国高等中医薬院校計画教材として『内経学』が出版され、学科としての成熟が伺える。08年には国家民政部（日本の総務省に相当）、中国科学技術協会、中華中医薬学会総会が、中華中医薬学会の内経学分科会を批准し、学术界でも認められることとなった。

2. 内経学の研究

内経学の主な研究の方向性として以下が挙げられる。1)『内経』や内経学の形成、発展の背景やその過程で歴史的に法則を研究するもの。2)『内経』の医学理論、疾病の予防治療の知識や技術を研究するもの。3)『内経』について、哲学や天文、暦法、社会、教育など学際的に検討し、『内経』の発展との関係を研究するもの。4)『内経』を臨床に活かすための方法や法則を研究するもの。5) 現在に至るまでの『内経』の主な成果や経験を総合的に分析して新しい学説を提唱するものなど。これらの研究にはさまざまな手法が用いられている。伝統的な各種文献、文字、哲学、天文、暦法、地理、気象、数学、心理、社会などの理論や方法だけでなく、統計、コンピューター、実験、臨床研究など現代科学を活用した方法論が内経学研究に用いられている。主な研究テーマとしては、五臓蔵神理論研究、四時五臓陰陽研究、内経理論体系研究、内経気化理論研究、内経と臨床研究などがある。

— 講演者略歴 —

1993年 明治鍼灸大学卒業
1997年 中国・天津中医学院修士課程卒業
2004年 中国・北京中医薬大学博士課程卒業
2004年 明治鍼灸大学 助手
2007年 明治国際医療大学 助教
2010年 明治国際医療大学 講師
2012年 明治国際医療大学 准教授
2017年～現在 明治国際医療大学 鍼灸学部 特任准教授

主な学術活動

全日本鍼灸学会 諮問委員・国際部副部長・JLOM関連委員会委員・編集部委員、日本伝統鍼灸学会 理事・国際部副部長・日本伝統鍼灸用語編纂委員会委員長・教科書調査委員会委員、日本中医学会 評議員、国際東洋医学会 理事、日本東洋医学サミット会議（JLOM）委員会3委員、ISO TC215 TF2主査（日本）、世界鍼灸学会連合会（WFAS）執行理事・標準化委員会委員

「明治期における日中医籍交流」

二松学舎大学文学部 教授 町 泉寿郎

はじめに：福沢諭吉『福翁自伝』に典型的に見られるように、日本の近代化は漢学の全否定から出発したという論調は今も根強い。医学も例外ではなく、かつての『医学文化年表』『日本医事大年表』等では「外国医事」は1868年を境に中国関係記事が途絶える。しかしながら歴史の推移には連続と断絶があったはずであり、また医学分野だけが特異的と考えられない以上、標記の問題も近代日中関係史の文脈から捉えなおす必要がある。

先行研究：近代日中医籍交流に関しては、先に岡西為人に「中国に渡った日本の漢方医学」（『日本東洋医学会誌』3-1、1953）があり、矢数道明に「日中漢方医学交流の歴史」（『国際漢方シンポジウム』1983）・「日中漢方医学の交流について」（『中医臨床』14-1）等があり、真柳誠に「清国末期における日本漢方医学書籍の伝入とその変遷について」（1983）・「丁福保与中日伝統医学交流」（『中華医史雑誌』22-3、1992）・「近代中国伝統医学と日本—民国時代における日本医書の影響」（『漢方の臨床』46-12、1999）・「現代中医鍼灸学の形成に与えた日本の貢献」（『全日本鍼灸学会雑誌』56-4、2006）等がある。中国側では、任应秋「中日医書の交流」も短文ながらポイントを押さえている。

明治前期（1890年以前）：日本書（含和刻漢籍）の中国刊は、山脇版『外台秘要方』の広東重印（1874）、医学館版『千金翼方』『備急千金要方』の上海重印（1878）、『経效産宝』の重印（1881）、楊守敬が日本滞在中に収集した多紀氏等著述の版本による『聿修堂医学叢書』13種の重印（1884）、多紀元堅『診病奇咳』の漢訳活字刊行（1888）、古写本『新修本草』の傳雲龍『簞喜廬叢書』刻入（1889）などがある。

明治後期～大正期：来日した羅振玉による森立之旧蔵書購入（1901）、盛宣懷の命で来日した丁福保による日本医書の中訳（1909～）、廖平による多紀氏著述への評注（『六訳館医学叢書』1913）などがある。以上のような日中交流を反映して、『中医図書聯合目録』には「国外方書」等に多数の日本書が収録されている。

昭和戦前戦中期：漢方復興（学術）と大陸侵出（政治）の関係解明は不可避の課題である。湯本求真『皇漢医学』（1927）は民国期の国医会の拠り所となった。満鉄経営の満洲医科大学に中国医学研究室が開設され（1926、1935東亜医学研究所）、大連図書館収集の漢籍から医書が移管され岡西為人（大谷光瑞門）によって整理研究が進んだ。上海自然科学研究所の中尾万三（大谷光瑞と親交）も本草研究に従事した。国内では大塚敬節・矢数道明・木村長久・駒井一雄・龍野一雄・柳谷素霊・清水藤太郎・代田文誌ら昭和漢方牽引者による東邦医学社（1935）、偕行学苑漢方講習会（1936）、拓殖大学漢方講座（1937）、東亜医学協会（1940）等の動きがあり、満洲では民生部が関与した漢医存続や漢方研究所構想もあった。承淡安の日本鍼灸書学習（1935）も日中医籍交流の好例である。

昭和戦後期：戦前以来の漢方医の交流は断続的に行われており、1950年日本東洋医学会創設の頃には新たに石原明・丸山昌朗・藤平健・奥田謙蔵・間中喜雄らも加わった。1972年日中国交正常化以降は日中学術交流が盛んになり医薬学書の共同出版翻訳等の交流事業が行われた。また同年に北里研究所附属東洋医学総合研究所が設立され、所内に開設された医史学研究室（後に医史学研究部に昇格）は古医書の文献研究に貢献した。

— 講演者略歴 —

1969年、石川県生まれ。

1999年、二松学舎大学大学院文学研究科博士後期課程修了（博士（文学））

1997年～2003年、北里研究所東洋医学総合研究所医史学研究部研究員。

2003年～二松学舎大学専任講師

2014年、二松学舎大学文学部教授

【専門】近世近代日本の学術史、とくに漢学と医学

【著書等】（共著）『シーボルト日本書籍コレクション現存書目録と研究』勉誠出版2104年（共著）

『近代日中関係史人名辞典』東京堂出版2010年（共著）『小野蘭山』八坂書房2010年

「近代日本の内経学の発展と普及」

日本内経医学会 会長 宮川 浩也

本発表は、昭和から平成にかけての『黄帝内経』に関する刊行物（テキスト・工具書・注釈書・研究書）を取り上げ、内経学の基礎固めとするものである。

1. 原本影印

①『素問・靈枢』日本経絡学会刊、1992（平成4）

＊テキストで善本の普及が叫ばれたのが1990年代。日本経絡学会は、設立20年を記念して発行した。両書の善本（顧從徳本『素問』、明刊無名氏本『靈枢』）を影印刊行した画期的業績。

②『素問』日本内経医学会、2004（平成16）

『靈枢』日本内経医学会、1999（平成2）

＊『内経』研究の高まりに応じ、善本テキストの普及をめざして刊行。『素問』は3刷、『靈枢』は9刷を重ねる。

2. 工具書

①『素問臨床索引集』国書刊行会、1979（昭和54）、『靈枢臨床索引集』国書刊行会、1982（昭和57）

＊東京中医研究会と北里研究所附属東洋医学総合研究所臨床古典研究班との共同作業。

②『素問・靈枢 総索引』日本内経医学会、1993（平成5）

3. 注解書

①田中古左衛門（？～？）

『素問』春陽堂、第1巻：1933（昭和8）、第2巻：1936（昭和11）

＊第1巻は、上古天真論第1から移精变気論第13まで。第2巻は、湯液醪醴論第14から平人氣象論第18まで。

②丸山昌朗（1917～1975）

『校勘和訓黄帝素問』全10冊、自費出版、1963（昭和38）

『校勘和訓黄帝鍼経』全12冊、自費出版、1965（昭和40）

＊後に合冊本が出る（1976）。他に『黄帝素問・黄帝鍼経の栞』（1995）など著作がある。

③小曾戸丈夫（1920～2007）

『意积靈枢経』東洋医学研究会九州懇話会発行、1969（昭和44）

＊後に築地書館から『意积黄帝内経素問』1971、『意积黄帝内経靈枢』1972、『意积黄帝内経運氣』1973、として公刊される。

④森田幸門（1982～1966）

『素問入門』全1冊、森田漢法治療学研究所刊、1973（昭和48）

＊上古天真論～六節藏象篇までの1冊のみ。他に『傷寒論入門』『金匱要略入門』などの著書がある。

⑤柴崎保三（1897～1988）

『黄帝内経素問新義解』全12巻、東京高等針灸学校、1968（昭和43）～1977（昭和52）

『針灸医学大系』全25巻、雄渾社、1979（昭和54）

＊『針灸医学大系』巻1～13は『素問新義解』、巻14～22は『靈枢新義解』が収められる。
柴崎の師は藤堂明保。

⑥池田政一（1945～ ）

『素問ハンドブック』医道の日本、1980（昭和55）

『靈枢ハンドブック』医道の日本、1981（昭和56）

＊初版以来、『素問』は26刷、『靈枢』は21刷を重ねるロングセラー。ハンドブックシリーズに『難経』『傷寒論』『金匱要略』がある。

第2部 シンポジウム「内経学の歴史と現況」

⑦石田秀実（1950～2017）・白杉悦雄（1951～ ）

『現代語訳黄帝内経素問』全3巻、東洋学術出版社、1993（平成5）

『現代語訳黄帝内経靈枢』全2巻、東洋学術出版社、1999（平成11）

＊南京中医学院中医系編『黄帝内経素問訳釈』『黄帝内経靈枢訳釈』（上海科学技術出版社）を翻訳したもの。
『素問』の監訳者の石田は九州国際大学助教授（当時）、翻訳には島田隆司・庄司良文・鈴木洋・藤山和子・勝田正泰・兵頭明・松村巧が参加。『靈枢』のもうひとりの監訳者の白杉は東北芸術工科大学教養部助教授（当時）、翻訳には松木きか・島田隆司・勝田正泰・藤山和子・前田繁樹・武田時昌・佐藤実が参加。

⑧島田隆司（1932～2000）

「ネット素問講座」<http://www001.upp.so-net.ne.jp/somon/>

＊伝統医学協会における講義録（7年分）を起稿したもの。膨大な分量ゆえ、広く利用されることを考えて、ネット講座とした。日本に限らず、世界中どこでも受講できるのは画期的。島田の師は丸山昌朗。

⑨家本誠一（1923～ ）

『黄帝内経素問訳注』3巻、医道の日本社、2009（平成21）

『黄帝内経靈枢訳注』3巻、医道の日本社、2008（平成20）

＊自費出版『素問訳注』（1999）を公刊したもの。家本の師は柴崎保三。

3. 各家研究

①矢数有道（1908～1946）

『方証学 後世用法釈義 素問活用論文集』自然社、1977（昭和52）

＊没後30年を期して、『漢方と漢薬』誌に発表した一連の『素問』『太素』に関する論文を収載して刊行されたもの。

②藤木俊郎（1931～1975）

『素問医学の世界』績文堂、1976（昭和51）

『鍼灸医学源流考』績文堂、1980（昭和55）

③素問紹識研究グループ

『定本素問紹識』日本内経医学会、1996（平成8）

④左合昌美（1946～ ）

『よくわかる黄帝内経の基本としくみ』秀和システム、2008（平成20）

『靈枢概要』ヒューマンワールド、2009（平成21）

— 講演者略歴 —

昭和56年 東洋鍼灸専門学校卒業

昭和61年 宮川漢法堂温灸院開業

平成 5～26年 北里東医研医史学研究部客員研究員

平成20～26年 日本伝統鍼灸学会副会長

平成27年～ 日本伝統鍼灸学会相談役

現在 東京衛生学園臨床専攻科講師

MEMO

MEMO

MEMO

MEMO

